

「母親の乳児の主観の読み取り」とアタッチメント形成

井上 望

〈目的〉

アタッチメントとは情緒的絆であり、危機的な状況において特定の対象を安全基地として利用することである。Ainsworth(1971, 1972, 1974)はバルティモアにおける乳児の母子関係観察から、安定したアタッチメントの形成にMaternal sensitivity(以下MS)が重要な役割をもつことを見出した。本研究は関係性の視点からMSを捉えなおし、MS母子の関係性を測定していることを明らかにする。そのためにMSが母子それぞれの気質や微視的行動分析の乳児、母、個別の行動特性とは関係ないことを明らかにし、母子の状態とは関係することを明らかにする。Maternal Sensitivityが、母子関係であると捉えることで、アタッチメント理論を基盤とした介入研究に関係性の新たな視点をもたらすことを目的とする。

〈方法〉

研究協力者：札幌交差文脈縦断研究に参加していただいている40名の母子。

気質質問紙：成人の気質質問紙短縮版Adult Temperament Questionnaire(Rothbart & Evans, 2000)と乳児の気質質問紙Infant Behavior Questionnaire-Revised(中川・鋤柄, 2005)である。アタッチメント安定性の評価：乳児が14ヶ月時に家庭訪問を2名で行い、研究者が持参した特定のおもちゃで乳児と関わりながら約1時間半観察をした。家庭訪問終了後、AQSを用いてアタッチメントの安定性を測定した(Waters & Deane, 1985)。

観察手続き：生後6ヶ月児の家庭訪問に観察者が一人で訪問し、観察者が持参した特定のおもちゃで10分間遊ぶ場面をビデオカメラで撮影した。

評価手続き：筆者とは異なる研究協力者二人が

Ainsworth Maternal sensitivity尺度(Ainsworth et al., 1978)を用いて分析した。

微視的行動分析手続き：10分間のおもちゃ遊び場面の母子の相互作用を分析した。行動分析は乳児、母、母子の三つの対象に分けて行い、Noldus Observer, ver 5.0を用いた。乳児が6ヶ月齢であることから、おもちゃを中心とした行動カテゴリを作成した。

〈結果と考察〉

本研究において評価されたMSとアタッチメントの安定性との間には有意な強い正の相関が見出され、安定したアタッチメントとの関連が確認された。MSと微視的行動分析の関連をみたところ、母子単独の行動とは関係がないことや、母子の気質とは関連がみられなかった。このことからMSは母、子それぞれに帰属する行動的特性でないといえる。一方MSは母子の関わりが不成功状態の、継続時間と有意な負の相関がみられた。本研究からMSが母子の行動特性とは関連せず、母子の関係性をも包含した概念であることが示唆された。このことは、母子への介入において、母子相互作用のシステミックな視点を取り入れることが、安定したアタッチメント形成に効果的であると言える。

〈主な文献〉

- Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Vol. 1; Attachment. Basic Books.(黒田実郎ほか(訳)1976『母子関係の理論 I ; 愛情行動』岩崎学術出版社.)
- Ainsworth, M. D. S., Bell, S.Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S.(1978). Patterns of Attachment: A Psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum Associates.